

あを 3

2007



正平鐵筆



無人華落
山田正平

あそ

三 月



あそ

あそ

満 作

天を飛ぶ夢見しことも屠蘇袋
日向ぼこ大きな雲の右手より
咲き損じたるやうなりし満作は
シンバルで春の空気をはさみつけ
空襲の母に掴まりぬるはわれ

東京 佐藤喜孝

雪

雪庇爆音たてて落ちにけり
大屋根の雪の庇のいつ落ちる
お日様に雪どけ託し今日暮るる
指の胼そつといたはる夜のラジオ
夜通しを電気はぐくむ寒の菊

三重 長崎桂子

北斗七星

埼玉 早崎泰江

休診の貼紙のあり年暮るる
沈みゆく陽に黒き点寒鴉
また空を眺めてをりぬ冬木立
紙粘土の小さき猪お正月
寒晴や北斗七星数へゐる

立春大吉肩の力を抜いてゆく
税務署に紅白の梅申告期
良寛か一茶かひとり春を待つ
大正のほどよき遠さ雛飾る
春風や昭和は雲の中にある

東京 堀内一郎

初句会

東京 森山のりこ

初句会 見馴れし友の句帳かな
初句会 ワイングラスは江戸切子
松納常の暮しの珈琲挽く
目に留まる粋な手拭初観音
小春日やチェロの調べの手術室

去年今年好い湯加減に包まれつ
初旅はエジプトと決め夢うつつ
節分草保護区の外れ坐禅草
節分草出会ひはいつも奇遇なり
節分草杓子菜漬の重きこと

森 理和

空

凍て空や鴉のこゑの撥ねかへる
虚空から冬のしらせの水のおと
富士山の湧き水西班牙の骨杯
防空壕の出口の父に添ひし冬
授りてほつと空だに冬櫻

東京 吉弘恭子

寒 牡丹

寒牡丹ひらくは箴の音に似て
地を摺つてほろびゆく風冬牡丹
冬の雷それきり山の眠りつぐ
日のうろやのの字に動く冬の虻
寒月の細さたしかめ窓閉ぢぬ

埼玉 渡邊友七

ほくほく線

東京 赤座典子

苦さのみ残つてしまふ屠蘇を酌む
日本海風抜けてゐる番屋跡
駅のホーム厚着させてるお父さん
温泉宿ブラックジャック読みはじめ
御鏡に串柿載せて漆器店

元朝の顔見合はせてよろしくね
冬の空しづしづ浮ぶ飛行船
湯けむりにゑびす顔なる冬の浜
マスクしてかるたとりする猫のそば
霜の夜眠りに障る思ひごと

東京 安部里子

寒晴や眼鏡のくもり幾度も拭く
風邪気味といふ日本語の曖昧さ
笹鳴のとび交ふさまや障子ごし
手のひらの薬数へて寒の水
朴散るやはたと音して息を吐く

神奈川

鎌倉喜久恵

初明り七十七歳誕生す
冬晴やズズイズイーツと青天井
発車ベルホロロホールル春隣
讀む暦元旦漱石の猫登場
歌会始歌書き留む正坐して

神奈川

木村茂登子

おほらかや電話で母の初笑
まちがひの天井届く年用意
年令を自慢してゐる日向ぼこ
冬の朝線香の煙ゆるぎなし
息とめて願ひ事唱ふ冬の朝

東京 齊藤裕子

麦の芽のどこへ風花下りるべく
冬籠る足にもくすり指があり
風花やある時高くさかのぼり
溶接の光が漏るる雪女郎
零下いま星座組みあふ音すなり

石川 定梶じょう

温室に暫し異國をたのしめり
照りかげる障子あかりのふたりかな
大寺の賑はひの中冬すみれ
身ほとりに明るさ運ぶ福壽草
凧追羽根の音なつかしむ

東京 芝 尚子

初護摩や空の彼方は見えぬまま
新玉や父のよはひを越えました
初コンサート夢の世界にしばし酔ふ
賀状読むカタカナ辞典かたはらに
ゆく年の尾灯の流れ歩道橋

東京 芝宮須磨子

冬帽子生きることから考へる
はつ夢や歩けぬはずの母と行く
落した薬すぐに拾つて飲む夜寒
椎の実を食べて子リスのふりをする
火を付けてすぐ吐く煙うす氷

東京 篠田純子

切干の白清々し広がりぬ
着水の下手な鴨ゐて飽きもせず
枯芝生サッカーの子と野球の子
もう六十まだ六十と梅ひらく
毎日の指先の輝山歩き

埼玉 須賀敏子

大寺の三寸余ある霜柱
初護摩や読経の僧のみな若し
寒中水泳応援の人震へゐる
厚着とも見えぬ老尼や石露の花
大股にとび出す冬の交叉点

東京 鈴木多枝子

自転車が小石を弾き春立てり
梅ふふむ無芸の雑種犬なりし
犬とんで鬼打豆を口で受く
古武士のごと内野聖陽豆を撒く
開け閉ての小言がふえし二月かな

埼玉 竹内弘子

たわむほど絵馬のかけられ寒の月
新墓へ花抱いてゆく霜柱
生姜湯を吹きて独りの夜を温め
冬鳥やこころを去らぬ顔一つ
大寒の屋根に瓦屋仁王立

東京 田中藤穂

暦より十一日 目初笑
寒鴉サンドイッチを誇らしく
指先の眼となりて毛糸編む
着ぶくれてシテのごとくに横を向く
肩幅に足を開きて梅を聴く

東京 東亜未

米櫃の底のブリキに暮早し

佐藤喜孝

冬の朝鴉と猫とひとの犬

東亜未

冬構仕事の人の聲たのし

長崎桂子

一羽来て何を啄む寒雀

早崎泰江

忘れかけた風景に冬惜しみけり

堀内一郎

冬の園水音響く方へ行く

森理和

山茶花や東司の窓の薄日いろ

吉弘恭子

わが触るる草より枯れよ人来ねば

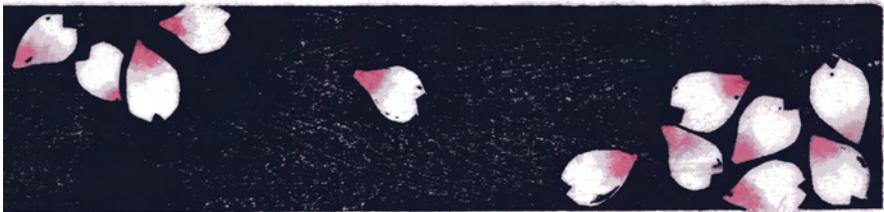
渡邊友七

冬蠅の無重力めく折返し

赤座典子

夫帰る窓拭き終へし冬座敷

安部里子



2月作品

五時といふ闇にはじまり隙間風	鎌倉喜久恵
みどり兒を膝にあづかり日向ぼこ	木村茂登子
焼 詣 の 屋 台 が 照 ら す 石 畳	定 梶 じょう
手 の ど こ の 切 れ た る 血 や ら 年 の 暮	篠 田 純 子
同 じ 話 お ん な じ 笑 顔 日 向 ぼ こ	芝 尚 子
飢 餓 画 面 飽 食 画 面 師 走 か な	芝 宮 須 磨 子
愛 犬 も 家 族 の 一 人 賀 状 書 く	須 賀 敏 子
い く た び も 終 の さ よ な ら 野 菊 咲 く	鈴 木 多 枝 子
留 守 の 間 に 愛 媛 み か ん の 届 き け り	竹 内 弘 子
思 ひ 出 の や う に 灯 の 点 く 冬 の 窓	田 中 藤 穂

喜孝 抄



一月作品より

竹内弘子・佐藤喜孝

開巻一番、一人十句に短文を添えるという新年号らしい賑々しさ。

見るとほっとします。

一瓣の力の抜けし菊の花

佐藤喜孝

傘さして酒呑んでをり冬の鳩

十一月末の川崎大師吟行は生憎の雨降りだったせいか、日曜なのに混みすぎもせず拝観することができた。

山門を入れてすぐ菊花展が開かれていた。葭簣で囲ったうえ、ビニールで覆われた立派な菊の花が、「一瓣」づつ衰え始めたのだ。次句、宿場らしさがある。

十五年余り飼っておられたラブラドル・リトリバー種の犬をなくされた。下段の文章を読むと、作者がどんなにこの犬を愛していたかが分かる。よるこんで遊んでいた山荘の側に「穴を掘」って見送ったのである。同種の牝だけが盲導犬になれるということを知りました。

いぼむしり鎌折り曲げて果てにけり

早崎泰江

生国の盆地冷ゆるという電話

田中藤穂

京都盆地や甲府盆地は、夏の暑いこと冬の寒さの厳しいことで有名である。盆地特有のものです。このところの異常気象を考えると、季節の移り変りがどうなっただのか、先の知れない不安を感じますが、こうした句を

この蠅螂の死の顛末は、下段の文章を読むとよく分かる。朝、雨戸を開けたとたん、作者の肩に触れて、下にあったバケツの中に落ちた蠅螂（いぼむしり）が、翌日そのまま前脚を折り曲げて死んでいったというのである。なかなか出会すことのない場面だ。

壮行や桜紅葉を電車ゆく

堀内一郎

壮行会などとも言いますね。旅立ちを励まし盛大に送り出されて、地元（牛込地区）の高齢者のクラブの方々が、バス三台で成田山へ初詣に出掛けたのです。地区のリーダーとして長年たんたんとお役をこなしておられるようですが下がります。

天からの授かりものに白魔あり

吉弘恭子

暖冬で人気のないゲレンデにゴンドラがぶら下がっている映像を観ると、雪は「天からの授かりもの」に納得する。が、ひとたび大雪となると「白魔」になるのだ。

表題「白」で十句、難しいといわれる「新年」を詠んだものが殆どで感服しきりだった。

かすかなる冬日の温み鴨睦ぶ

渡邊友七

例えば浦和の通船堀のような細い川でも、二羽づつ「睦」び合ってあそんでいる。薄い冬日が水の少なくなつた川の底まで柔らかに差し込んでいます。川沿いの桜並木の、苔がふくらみはじめる頃である。

しづるるや水掛草鞋濡れに濡れ

木村茂登子

川崎大師吟行は、川崎にお住まいの茂登子さんのお世話であった。ずっと以前東京から移って行かれたそうだが、川崎をこよなく愛され、言葉の端々に神仏に寄せる信仰心の篤いことがうかがえる方です。

糸ほどの絆の人よ賀状書く

芝 尚子

「糸ほど」でもあればと思います。何年も会わず、電話、手紙のやりとりもなかったら友人関係は書くまいときめても徹底しなくて淡い悔いのようなものがのこります。書いても書かなくても。

《賀状うづたかしかのひとりよは来ず 信子》

電飾を重たげにして枯銀杏

須賀敏子

クリスマスシーズンの頃から、樹木に掛け廻した電飾がそのままになっている所がある。有名なレインボウブリッジほか、都会では夥しい量の電力が絶え間なく消費され続けている。

この国はどうなつてゆくのだろう。

子規一門の連句

めさまし草（明治二九年七月号）

門口に櫓の下枝の茂りかな

正岡子規

衣を更へて薪わる人

佐藤紅緑

渺々と田の面の風のわたるらん

同

湖にのぞみし小城灯ともす

高濱虚子

羽織着て名主へ参る夕月夜

規

案山子の顔の何に驚く

緑

打たれたる雁は落ちけり沼の中

河東碧梧

死者の役目のはてし草臥

規

冬ごもる天井に反故を張りつめて

緑

梵論寺も来れば炭賣も来る

桐

其中に祝言の日の近つきぬ

規

髪かきあげて心ときめく

緑

月は今枝折戸近く入りかゝり

桐

菊古くさき万葉の秋

規

燈籠を馬につけたる瘦男

緑

地藏の膝にもゆる吹賣

佐藤肋骨

花に行く道は左に海遠く

桐

春の夕を鏡とぐなり

子

二人来てものを争ふ蜆賣

規

腰に草鞋をぶらさげて居る

緑

山本は隣つゞきに寛して

骨

此頃出来し屠殺場もあり

桐

蒟蒻は蒟蒻玉の變化にて

子

とこしへにさびず竹光の太刀

規

古郷に歸れば娘恙なし

緑

佛壇の戸を開く短夜

骨

夏蟲の灯を消ちたりと覺へける

桐

敵をねらふ近江商人

子

法螺吹いて群集あつむる晝の月

規

鶏頭倒れし背戸の細道

緑

鯛賣る秋もつもりて五十年

骨

瘤を切りたる顔の淋しき

桐

贈られし百壺の酒を飲み盡し

子

下手な詩つくる男爵の君

規

大内の花しらしらと明けわたり

緑

貢の車つゞく春風

骨

柳田国男

この一巻の歌仙を味はふことによつて、始めて私たちの知つたことは幾つもある。第一にこの連衆は、どうしてどうして中々の玄人であつて、古來の卷々も身を入れてよく讀んで居り、決して形ばかりの模倣ではなかつた。それに新しい仲とは言ひながら互ひの氣持を十分に汲み取つて、其角一派のやうな當てつぽうな附け方はして居ない。假に作物はどこにも傳はつて居なくとも、是が始めての試みだつたらうとは、どうも私には思はれないのである。さうすると子規子等の連句排撃も、今日の多くの俳人のやうな、單なる噲はず嫌ひではなくして、やつては見たけれども深入りすることが出来なかつた。又は全力を傾けるほどの魅力を見出すまでに至らなかつた。或は発句の方がもつと面白く、従つて張合ひがあると思つたといふまで、あつたかも知れない。何の本に出て居たのか知らぬが、とにかくに自分のものでもない文學の定義なんか持つて來て、それに合はないから連句は文學で無いなど、揚言したのは、後からくつゝけた理由とより他は見られない。皮肉な解し方をするならば、いはゆる俳句を今の如き隆盛にもつて來るだけの、目算がすでに立つて居たからともとられる。それ位な野望があつたとしても、我々はびつくりしないのである。

それから今一つの氣づくことは、この歌仙は明らかに一晚のうちに巻き上げて居る。五人の連衆の二人までが中途から加はつて、ずつと續けて居るのだから、二度三度に分けての催しではない。六月に出來たものがもう七月號に公表せられたのだから、所謂作後の改訂の無かつたことも略々たしかである。この二つの點が、後世は次第に守り難く、誹諧衰亡の主たる原因も、實はそこに在つたかと思はれるのだが、若い元氣な五十餘年前の俳人たちは、ともかくもそれを昔通りにやつてのけるだけの熱心さを持つて居た。といふことをもう我々は忘れかけて居るのである。だからこの一巻の歌仙の、史料としての價値は大きい。誹諧が此先どうなつて行くかを考へる爲にも、斯ういふ近代史は粗末にすべきものではないと思ふ。

《定本 柳田国男集 第十七卷》「筑摩書房」より転載。

連句は文學にあらざると子規が言いそれが因で連句が衰微したと安易に思つていた。柳田国男のこの文を讀むと一概にそうとは言えないようだ。連句には柳田国男の解説、評文が乗つてゐるが此処では割愛した。連句原文は併写しかなかつたので姓を加筆した。

《佐藤喜孝》

冬の園

竹内弘子

時の鐘に合はせて啼けり寒鴉

七厘に炒った椎の実ふるまはる

赤い実も青い実も小鳥たちのもの

いつしかに眼鏡のくもる室の花

うつぼかづら昆虫容れしまま枯るる

あうらより温かくなる落葉かな



雑木山うすむらさきに眠りをり

やまふぢの枯くちなはのごと撓ふ

黙劇の身振りのやうに裸木は

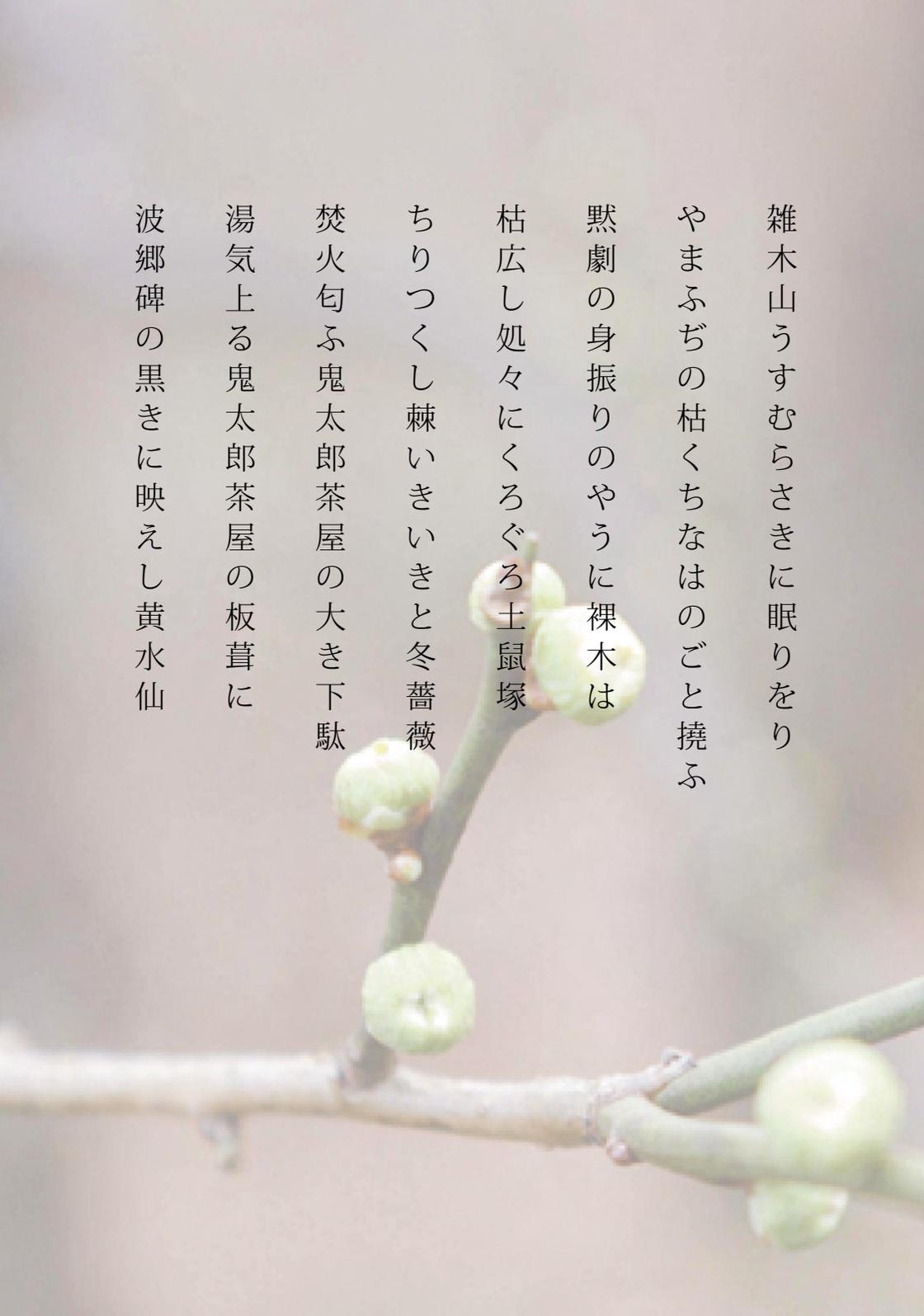
枯広し処々にくろぐる土鼠塚

ちりつくし棘いきいきと冬薔薇

焚火匂ふ鬼太郎茶屋の大き下駄

湯気上る鬼太郎茶屋の板葺に

波郷碑の黒きに映えし黄水仙



標

定梶じょう

標であるく曲つてしまひけり

終電車車輪が霜のレール噛む

着ぶくれてみんな善人峠バス

水洩や宮番板の間に待すも

懐手貧乏神もきつとする

寒に入る立食ひ蕎麦の釜の湯気

安寧や廃車置場に雪がふり

粉雪降る派出所の赤ランプかな

この丘にみぶくしを持ち露のたう

冴えかへる三年坂は石畳

春一番半島ここで折れまがり



山椒魚 深爪の人 逝きしのち

深爪の人は神経が細やかだと聞いている。先日電車の中で日経新聞を読みながら爪をかじっている人に会った。五十位の人だと思うが、年をとつてもなおらないのであろうか。息子も小さいときから深爪で心配したことが多々ある。すこしでも伸びてくると歯で噛んでしまうのだ。指から爪がすこしでもでると気になってしまいうらしい。

この句にはその人が逝つてからとしか詠まれていない。こればかりはよみてが作者の心を想像するしかない。

山椒魚とはテレビでしか見たことがないが褐色の薄暗い色をしている。その手足？にある四本の指は何だか面白いというか、可愛くも感じられる。

深爪の人と山椒魚とのとり合せは、亡くなった人を想像して特定出来ると納得してしまう。想像出来ない人にはどうであろうか。四本の指から何となく深爪を想像出来て楽しい。

取り合せの妙であると共に季語としての山椒魚がきている。

うしろからライオン見てはいけません

百獣の王ライオン、特に牡ライオンは鬣を持っていかにも王ですよという風貌を持っている。真正面から対峙したら檻の外にいても恐ろしいことである。ところがあのライオンうしろから動物園で見たことがある。鬣を奮わせた大きく見える頭も、後ろに回ると感じが全然違う。お尻が頭に比べると小さいと（走り回るので引き締まっているのあろう）思った。

やっぱりライオンは前から見て恐ろしさを楽しもう。

春の野邊イルカ跳びして土龍ゆく

冬枯の深大寺公園に吟行に行った。下草も枯れこれから新しい芽が出る気配のする土に真新しい土竜の穴、またいつ掘ったのだろうと考えさせられる穴、コンクリートでは見られない土の動きに楽しくなって少し動きすぎたことを思い出す。

イルカが海を跳んでいるのはテレビで見たことがあるが、地面に出来た土竜の穴の間隔を見るとふとイルカと同じように宙を跳んで地中にもぐる、をくり返しているのではないかと。あのコロコロとした身体の土竜が野のあたりをイルカと同じように跳んでいるとしたら面白い絵が出来る。見てみたいのもだ。このような発想の楽しい句も出来ることなら詠んでみたい。

見たままを句にするには限界がある、俳句人口が多いなかで何処かで見たとような個性のない句ばかりが並んでしまう。作者自身の色をどの俳句のなかにも輝かせることが出来たら、作句することも読むことも楽しくなるだろう。

いつの世のどれかは知らず螢文字

螢の持つている発光器。暗い中で螢を見ると光っているところだけが見えて身体は見えない。螢文字とはその発光体が出し動いたひかりによって描かれたものが螢文字、みやびな表現の仕方でそんな文字もいつの世にか出来上ってしまうのではないかと思ってしまう。出来たらいいなあと思ったりもして。

題は、新干支とあるが、そろそろ子・丑・寅……亥も飽きてしまったので新しい干支も出来てもこれまた楽しいかなとこの句をよんだ時に思ったりもしている。



漢訳蕪村

(春の句)

王 岩

備々假寐醒來晩、遅々春日已黄昏

うたた寝のさむれば春の日ぐれたり

壁漏青煙春雨濃、有人又居此屋中

春雨や人住んで煙壁を漏る

暮春筑波山、紫色峰容減

行春やむらさきさむる筑波山

山麓搗米水車響、紫藤花房顫微々

山もとに米踏む音や藤のはな

櫻花御能看又過、徹夜長啼浪花人

花の御能過て夜を泣く浪花人

瀟々春雨迷濛中、蓑衣共笠相語行

春雨やものがたりゆく蓑と傘

あをかき集

堀内一郎 選

木枯
山茶花
米

仄聞は山茶花のうしろにたまる 吉弘恭子

音聞きの行つたきりなり姫つばき

山茶花の色をとごこめ池凍むる

産み月を明日にひかへし姫つばき

山茶花散る小猫の前足うしろ足

山茶花や地球はまるく凹むとき

木枯や小股の裾を取られけり 芝 尚子

凧を阻む大木伐られけり

木枯の夜あはあはと猫を抱く

勿体なや冷たき床に米拾ふ

吉弘恭子

「仄聞」は硬く「音聞」は聞き慣れぬが良くまとめている。姫つばきは山茶花にしかず。仄聞は最近の納豆問題等世情を言い放して出色である。「凹む」は温暖化を思わせる。言葉も表現も前向き。

芝 尚子

「小股の裾」は日本女性のあり様を示している様だ。それは眼前日常の服装に現れて如何にも、お粗末になってきた。「凧」には近代化への憂いも。



米寿の人元気に赤きちやんちゃんこ
山茶花のこぼれ寺町華やぎぬ
木枯を連れて入りたる自動ドア

東 亜 未

木枯の後稜線のひきしまる
翌日は晴木枯を忘れ去る
山茶花や笑ひころげる男の子
片付のあとの米とぎ大晦日
米磨ぐは日本の形除夜の鐘
木枯や少年倶楽部買ひにゆく
木枯へ出てゆく猫と顔合はす
背の襖かたかた夜の木枯が
木枯やロシヤ人形遠目して
山茶花の照り耀へり過疎の村
新米や米屋と交す政治論
木枯や捨てし扇風機のまはる
ていねいに米をとぎをり一葉忌

篠田純子

東 亜 未

類想はあるが下五「自動ドア」の突放
しの効果抜群。「米磨ぐ」は日本人の生
活の原点。「美しい日本」クリーンな日
本は主婦の手から生まれると言っても過
言では無いようだ。

田中藤穂

少年倶楽部が昔を語る。今の子は寒い
日は家に籠ってゲームに現を抜かす。良
いか悪いか。「米屋」スーパーが出来て
ご用聞きが少なくなつた。これも政
治のせいかな。皆、話を欲しがっている。

篠田純子

「醜き機械となれり」と篠原梵は言っ
たが、作者は「扇風機」にいのちを与え
たのである。米とぎ、それは日記のよう
におんなのひたむきな姿。九九は作者の
ひらめき。今年も面白くなりそうだ。

ひめつばき戦火で目鼻溶けし像
貧乏の追ひつきさうな夜木枯
山茶花や七の段だけ九九を云ふ
米嚙をじんと力ませ一葉忌
木枯の道となりたるアーケード

赤座典子

木枯の とんと 躓く石畳
木枯を払落して家に入る
広き墓所白山茶花のおほひたり
反米の語のなき辞書や紅葉散る
土鍋にて卵雑炊発芽米
路地の奥山茶花の白うすあかり
木枯の電線鳴らす弦のごと
木枯の吹きすさぶ中なほ孤独
木枯や心の闇を吹きとばせ
行き暮れて木枯のなかプレゼント
打ち寄せる波木枯のプレゼント

安部里子

鎌倉喜久恵

赤座 典子

木枯、石畳に「とんと躓く」が潤いを重ねる。俳句の妙。「払落して」ウイルス流行で手洗い、うがい、服を叩いて家に入る。いろいろ置いてみたが「木枯」が一番よい。「反米」辞書に無いがワープロにある不思議さ。

安部里子

「うすあかり」、心の光明と見てよい。木枯三句は心の起伏を伝え生きさまを奏でている。「弦のごとし」として重みがつく。くどいが新米の幸福感もOK。

鎌倉喜久恵

忌まわしき「木枯」を陽性に変えた。波の姿も晴れ晴れと見えてくる。「米とぐ」単調な日常になったが一連に暗さが無いのは売実感の現れと思う。

里神楽三宝に米奉る

新米を粥に仕立てて母の膳
米とぐも日常となり定年後
山茶花を散らし本日休診日

木村茂登子

木枯を遠ざかりゆく靴の音
侘茶とて木枯といふ菓子添へて
新米のこれぞ窮極塩むすび
冬休受験子に説く「米百俵」
齒科治療待つ山茶花が挿してあり

定梶じょう

凧が奪ふ焼藪の拡声器
米屋はや戸を差す師走十四日
自転車があつまる塾の山茶花垣
凧や世に狎るまじく襟立てて
なつかしき山茶花垣に日の当る
木枯に土けぶり上げ野菜畑
木枯の顔にひりひり突きささる

鈴木多枝子

木村茂登子

「靴の音」はるかな別れを思う。何時までも消えない靴の音。「新米」は飾りは不要ということ。「木枯といふ名の菓子」名のは省略したが良い。

定梶じょう

「齒科治療」患者にとつては一輪の花も救いになる。その気づかいが嬉しい。

「米屋はや」米もスーパーで売られるこの頃、十二月など昔は夜中まで灯を絶やさなかったが、町に閑古鳥が鳴く。

鈴木多枝子

作品に憂いは見えない。「山茶花垣」にしても在るがまま、なるがままの境地に身を置くようだ。ものを確と捉えて光に聴い。「研ぐ米」の生きがいも。

木枯の地蔵頭巾のずれてをり
研ぐ米の光うれしや冬うらら
木枯や年を重ねて軽きかな
須賀敏子

山茶花のこぼれるままに無人駅
山茶花や追ひ越すよりも追ひ越され
米基地の金網越しに白き富士
妹の便り糯米柚子添へて
木枯や古紙回収に大童
長崎桂子

木枯に鍋恋ふ時季と思ひけり
山茶花や垣に方言楽しげに
山茶花の接ぎ一木赤と白
冬ぬくし米糠の床かきまぜる
山茶花の垣根の蔭に立話
早崎泰江

山茶花や散り惜しみつつ人逝きし
木枯や馬ひたすらに走り抜く
貝塚に木枯の音たしかめる

須賀敏子

「無人駅」に無常感が漂う。風景だけが取り残された。夕張現象と言える。元句「米軍」を上記のようにした。「追ひ越す」は作者の慎重な姿勢である。

長崎桂子

「木枯に鍋恋ふ」は飲み手か食欲旺盛命の強かさを語り、「冬ぬくし」に内助の功、ご苦労がにじむ。

早崎泰江

「無人精米」都会では見られぬ風景で周囲も見えてくる。こせこせした都心とは違う地方の魅力。「馬ひたすら」は自身にも三者にも勇気を与え、「貝塚」の悠久の声も見逃せない。

森 理和

年の瀬に無人精米人多し
木枯や過ぐる夜警に夫のをり
山茶花や友と知人は無二の友
山茶花や祖母に寄り添ふ腰ズボン
山茶花の垣根ぐるりと女学校
何は扱皆の箸出す五万米炒る

和田魚里の庭を偲びて

佐藤喜孝

山茶花の根もとさらさら日のおそぶ
山茶花や元は火鉢の金魚鉢
さざんくわのところどころに日のおたる
木枯や犬の毛布が木の股に
山茶花や園児の列を待ちぬる犬
像虫の混じりたるかに五穀米
凧や感極まれば哭くことも
上海は一月遅れ姫つばき
搔込みの稻穂の米も嫁が君

竹内弘子

堀内一郎

「木枯」の、ご主人の姿に格別な感情
が湧くうち忘れていた敬慕の念か。

厳しきもの、ほのかなものとの往還が
絵になっている。最後の一句、喜孝さん
に読でもらった。読めなかつたので。「な
にはさてみなのはしだすごまめいる」

底流しているのは幸福感である。



あを鷹詩記(三月)

田螺 田螺鳴くこころのどこかのぞかれて

虹生んでつぶやきやめぬ田螺たち

水澄むや田螺棲みをりほてい草

水澄めり田螺も人もあぬ田圃

泳ぎたきしつばのなくて田螺鳴く

電子辞書引き倦みし夜の蜷汁

影のやうに濡らし蜷賣はぬす

土用蜷薬なればと膳にのす

四行で終る学歴蜷汁

燕 燕ロシアンティーを淹れませう

KOBANのOを占領す燕の子

潮騒や螺鈿造りの燕の巢

初燕反り身に見上げ日暮時

むらさきと黄いろの野原つばくらめ

東風 強東風や波間に弾む朱い玉

荒東風や曾てはありし千人針

東風吹かば大猩猩の大胡坐

朝東風や老いてゆくてふ富むること

アスファルトの隙間に咲きし葦かな

葦 野路葦妻蒲公英鉄条網

身に近いいくさとなりし葦咲く

樁 ひらくより風にさはりし白樁

鴨の触れざる樁選びけり

後藤 志つ

渡邊 友七

斉藤 裕子

佐藤 喜孝

定規じょう

竹内 弘子

佐藤 喜孝

鎌倉喜久恵

篠田 純子

芝 尚子

鎌倉喜久恵

森 理和

田中 藤穂

長崎 桂子

竹内 弘子

芝 尚子

吉弘 恭子

東 亜 未

須賀 敏子

篠田 純子

山莊 慶子

鈴木多枝子

赤座 典子

あを吟行会のお知らせ

吟行地 国立自然教育園

日時 五月二十日(日) 午前十一時

集合場所 公園入口

交通◎JR「目黒」東口 都バス品93 大井競馬場行

二つ目「白銀台五丁目」下車

◎地下鉄南北線「白銀台」徒歩五分

食事 各自お弁当持参

句会場 港区白銀台福祉会館(一時〜)

03・3440・4627

申込締切 五月十日

幹事 齊藤裕子 03・3441・7338

一月の句会

傳句会

中野区 カフェ傳

あを吟行

深大寺

洗顔のあとの眉うせ年新た

異国語を話すくちびる室の花

すれ違ふ互ひにひとり冬帽子

天ばかり眺めてやまぬ枯木立

枯野来る君紅の唇ひらき

照りかける障子あかりのふたりかな

盛塩のすこしくづれし日脚伸ぶ

緩やかにナイルを下る冬夕焼

まちがひの天井届く年用意

人日の檻を出てくる調教師

躰けば人のやさしき迎春花

初明り七十七歳誕生す

日脚伸ぶ疊の部屋のおもちや箱

寒鴉サンドイッチを誇らしく

納豆や身に覚えなき言はれやう

開戦日自動扉の前に立つ

碑の楽譜のシャープ梅ほのか

咲き損じたるやうなりし満作は

調句会

さいたま市岸町公民館

鶏の味濃き新瀉の雑煮かな

休診の貼紙のあり年暮るる

一月の色紙に夢の一字かな

福達磨抱かれて通る裏銀座
石と言ひ紙を出すなり初笑

敦子 弘子

温室に暫し異国を楽しめり

落椿捧ぐ波郷の黒い墓

古木より花逆立ちす冬至梅

うつぼかづら昆虫入れしまま枯る

わびすけを供へし波郷の墓まひり

樫のうしろに冬日もれいづる

大寒や土やはやはと植物園

薬困手のひらほどの寒牡丹

木にありしときより佗助匂ふかな

蕎麦搔や二階は隠し部屋のやう

七座句会

中野区

小川苑

空耳か枯野横切る時呼ばれ

戦前に弥まさるもの火鉢の火

応援の人が震へる寒水泳

連立すビルの間に初御空

空箱に空箱仕舞ふ十二月

渡されし稚の実噛めばほの甘し

身ほとりに明るさ連ぶ福壽草

防空壕の出口の父に添ひし冬

神殿の煉瓦を突き寒雀

初春や風林火山国言葉

調句会 毎月第3木曜

岸町公民館 竹内弘子

(0468-86-3501)

あを林檎 偶数月第3日曜

京橋プラザ三号室(四月)

篠田純子 (5250-2776)

七座句会 毎月第4火曜

小川苑 吉弘恭子

(090-9839-3943)

あを吟行会

国立自然教育園(五月)

奇数月 第3日曜

綾子 泰江

須磨子 理和

藤穂

尚子 藤穂

弘子

尚子 藤穂

喜久恵

弘子 典子

綾子

里子 東亜未

敏子

夏子 喜孝

純子

木枯 多枝子

東亜未

喜孝

藤穂

尚子 藤穂

裕子

里子 東亜未

理和

尚子 藤穂

敦子

喜孝

藤穂

里子 東亜未

茂登子

喜孝

傳

句会で「ささやかな持重り良し鶯餅」を頂き「てのひらに乗せたとき思っていた以上に重かった」と「持重り」を解釈した。複数の人から「持重りは持っている間にだんだん重くなったこと」とだと訂正があった。確かに手元の電子辞書「広辞苑」ではそうになっていた。狐に抓まれた心持で納得した。家に帰り辞書を調べてみた。

◎ 持っているうちに次第に重く感じることを。(大辞林・三省堂)

◎ ちよつと持ったときに感じる重さ。持っているうちに次第に強まる重量感。(新明解国語辞典・三省堂)

◎ 持つて重く感じることを。持ちつづけているうちに重くなって、手が疲れること。(日本語大辞典・講談社)

◎ 或物を持つてゐて、重く感ずることを。持つてゐて、手の疲れること。(大辞典・平凡社)

◎ 初めはさほど感じないのに持っているうちに次第にその重さを感じるようになること。持つているうちに疲れ重く感じることを。(日本国語大辞典)・小学館)

やはり多勢に無勢はかわりはないが、私の読みと同じ辞書もあつたので何となく一安心。

う

ちの野良猫が右前脚を地面に着けず歩いてきた。扱がわからないので医者へ連れて行ったら、四日も医者通いする羽目になった。馴れぬ家の中に三日も留置かれ

た。まだ子猫だが雄だそうで喧嘩をして怪我をしたらしいとのこと。診察券には佐藤ノラネコと書かれたが、医者に何か名前を付けると云われた。作ってもらった写真入の診察券には「佐藤アリ」とあった。私が着けたのではない、念のため。もう良いと云われたので早速外に出した。眼光鋭く当りを眺め回して消えていった。表紙は昨年三宝寺池での写真です。(喜孝)

ご芳志多謝

芝 尚子様 田中藤穂様 森 理和様

二〇〇七年三月号

三月十五日

発行所 東京都中野区中央2・50・3
電話 090・98828・42244

印刷・製本・レイアウト 佐藤喜孝 竹僊房
カット／恩田秋夫・松村美智子 表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
郵便振替 00130・655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。